

近代における在郷町の都市・建築空間と産業化の影響

—茨城県桜川市真壁町を事例として—

日本建築学会計画系論文集/ No. 621/ pp. 243-250/ 2007年11月

正会員 中野茂夫君

本論文は、研究史料価値の高い明治35年に作成された真壁町の家屋台帳を用いて、近世と近代の在郷町の空間構成の原型、継承・変容の実態を建築・都市スケールで丁寧に再現・考察すると共に、在郷町特有の近代化過程の実態を産業化との関連から明らかにしている。

これまで研究の蓄積が不十分であった、在郷町の空間構成を、家屋・土地情報に基づく精緻な分析によって明らかにしている点、近世から近代、現代に至る産業化、空間構造の変容の対応の考察において、有意義な史料の発掘、分析方法を示している点で研究の意義を認めることができる。

伝統的な建築と都市構造を今なお維持する真壁町が近代産業を受け入れてきた空間変容過程を読み解く、史料性の高い優れた論文である。保存対策調査という公的調査研究を計画論の学術論文として独自に発展させた論文としても評価した。